

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

海の輝きのために

神奈川県立相模原中等教育学校 2年 佐藤 和馬

夏休み、家族と久しぶりに海へ行きました。小さい頃から夏は海、と言うくらい海が大好きで、砂浜で遊んだり、きらめく水面を眺めたりするのが本当に楽しみでした。でも、今年の夏は、少し違いました。

車から降りて、潮風の香りを胸いっぱいに吸い込む。あの懐かしい香りに、心が弾みました。しかし、砂浜に足を踏み入れた瞬間、その期待は少しづつ崩れていきました。遠くから見ると、青く輝いて見えた海は、よく見るとにごっていて、透明度がありません。そして、砂浜には、どこから流れてきたのかわからない、無数のゴミが散乱していました。

ペットボトル、レジ袋、お菓子の袋、タバコの吸い殻。それらのゴミは、波に打ち寄せられて、砂の中に埋もれかけたり、岩の間に挟まったりしています。まるで海が、私たちが捨てたゴミを、そのまま吐き出しているようでした。

私は、これまでに見たことのない海の姿に、ただただショックを受けました。

それまで、海の汚染という言葉は、教科書やニュースの中でしか聞いたことがありませんでした。遠い外国のどこかで起きている、私とは関係のない問題だと、無意識のうちに決めつけていたのかもしれません。でも、目の前に広がる光景は、紛れもない現実でした。それは、どこか遠い国の人人がしたことではなく、私たちと同じようにこの地球で暮らす人々が、無責任に捨ててきた結果なのだと、強烈に感じました。

波打ち際で、透明なビニール袋が、クラゲのようにゆらゆらと揺れているのが見えました。それを、まだ幼い子どもが

「わあ、クラゲだ。」

と言って、無邪気に指をさしていました。その姿を見て胸が締め付けられるような気持ちになりました。ビニール袋を本物のクラゲと見間違えて、食べてしまう生き物がいる、という話を聞いたことがあります。そのビニール袋も、もしかしたら、魚やカメが食べてしまうかもしれない。そう思うと、本当に、心が痛みました。

この旅行をきっかけに、プラスチックは、海の中で細かく碎かれ、目に見えないほど小さくなって、マイクロプラスチックと呼ばれるものになること。このマイクロ

プラスチックは、魚や貝に取り込まれ、それを食べる私たち人間の体にも入ってくる可能性があること。つまり、私たちが捨てたゴミが、回りまわって、私たちの体に戻ってくるということを知りました。

コンビニでもらうプラスチックのスプーンやフォーク、自動販売機で買うペットボトル飲料、スーパーで買うレジ袋。これらは、とても便利で、当たり前のように使っています。しかし、その便利さの裏側で、地球の海は少しづつ、悲鳴を上げているのかもしれません。

海の汚染は、単に景観を損なうだけの問題ではありません。それは、地球の生態系全体を破壊し、そして最終的には、私たち自身の健康にも影響を及ぼす、とても深刻な問題なのです。海の生き物たちは、私たちのゴミによって命を脅かされています。海は、地球の酸素の半分以上を作り出していると言われています。その海が汚れてしまえば、私たち人間も、安心して生きていくことができません。

この問題は、私たち一人ひとりが、自分事として考えるべき時が来ているのだと思います。大きなことをする必要はありません。まずはできることから始める。例えば、マイボトルやマイバックを持ち歩くこと。使い捨てのプラスチック製品を、できるだけ買わないように心がけること。そして、何よりも大切なのは、ゴミをきちんと分別し、絶対にポイ捨てをしないことです。

私たちの小さな行動が、未来の海を守ることにつながります。私たち一人ひとりに意識が、海を、そして地球全体を変えていくと信じています。

あの海で感じた衝撃は、私にとって、忘れられない大切な学びとなりました。たくさんの生き物たちが、安心して暮らせる海であってほしい。そのため、私たちは、これからもできることを続けていくべきだと思います。

海の輝きは、地球全体の宝物です。その宝物を守るために、今、私たちにできることを、一緒に考えてみませんか。